

象軍は森を過ぎりて大湖に水もどめあり薄月夜かな。
乞食らと峰に焼きし筐栗の味わすれぬず丹波路の旅。

木枯よ朽つる百千の虫を去るかなしき魂のなげかひに似て。
海賊の砦すたれし岩に攀ぢ洋の入日の紅を見る。
雪の夜や讀經の僧の倦んじがちに燈明ゆれけり十月の寺。
天體の運行につれ吾が心かはりゆくかなうつるともなく。
田原坂いがほころべる大栗の毒血の色に夕焼のする。
阿蘇たびら煙につゝく夕雲のほのむらさきの夢あはきかな。

俳句

紫浜吟社句錄

九月十八日午後、於余根屋。會者十名。

秋晴れ

巣叩けば虫皆あらず秋晴れて

滴人

秋晴れや鹿島詣の刀鍛治

文者

秋晴れや粟の穂末に浮く白帆

春草

能工の大和巡りや秋日和

江韻

島の神遷宮を秋晴るゝなり

蜩のなく島の温泉や秋日和
秋晴れや籬落を綴る柿赤し

蟬月
ヤヨキ

芝山や瘦軀の松を秋はるゝ
秋晴れや曲藝の象見て歸る

江村
鬼葉子

野戯近き棧敷構や秋晴るゝ
秋晴れや粟の穂末に浮く白帆

明日卸す船の祝や秋日和
此君子

五座の峰二座に雲あり秋はれて
能工の大和巡りや秋日和

全水郷

曼珠沙華

曼珠沙華不入の庭の垣荒れて
移り住んで隣に疎し曼珠沙華
曼珠沙華三章の札立て換ゆる
藻潤りを魚死ぬ沼や曼珠沙華
全廿四日夜於余根屋。會者八名。

文

渡り鳥

再録に腕の疲や渡り鳥

乾きやらぬ糊張板や渡り鳥
渡り鳥土積む舟の徐々として
逆に流るゝ舟や渡り鳥
農と漁と兼ね浦の日や渡り鳥
林端に續く山湖や渡り鳥
桑畑となる沿尻や渡り鳥
網曳くに高風ぐ湖や渡り鳥
稍近く冷雲過ぎて柿赤し
柿

苑

滴人春草水鄉水鄉
人草鄉脚脚

雞頭

門に積む秣薰るや柿の秋
假橋あり奇岩あり村の柿赤し
草湯出れば足の赤さよ柿の秋
蹴落せし熟柿見て鳴く鶲哉
碧湖に浦七村の柿赤し
馬を馳る仕事着鍛冶や柿の秋
十月十六日夜於箕踞洞。會者七名。

文者
黙牛
汀韻
江村
全

紅黃

灘は今雞頭日和や
竹垣の全じ二軒や雞頭花
雞頭や小障子白き流し元
積藁を崩す埃や雞頭花
怠りし消息恥ぢぬ雞頭花
瓦籠の帰や赤し雞頭花
全

蟲
春草
水鄉
青淪

蜩や晩歸の鞭も大農車

蜩や大漁云ふも浪占に

水嵩觸れ有りしを霽れぬ蜩に

蜩や荷汗拭はん洞ありて

手綱染めの櫻も牧場踊哉

不希哀死不希恒生と打つ砧

夜啼鳥雨をや誘ふ島砧

底濁る眼も鑛山者や濁り酒

酴醿醸醤や又竹光を泣く奴

煤落す鼠を怒る濁酒哉

天主台二樹長短や天の川

月も缺けて雪誘ひ鹿となりけり

海女の子の海月かぶれや秋暑き

我疑心暗鬼生む野の夜寒哉

島唄は背子待唄や蘆の花

金峰山紀行
杉寒し岐路の根高を蜩に

狂言鬼の槌

濁酒やらむ酌むに冠者舞ふ小竹筒哉

阿蘇火口原

二番桑のヨナ枯れを鳥渡りけり

秋季雜吟

人

水鏡に澄む万象や今朝の秋
秋立つや炊かぬ釜の底鏽に
此の秋火災頻々

今朝秋や地に祝融の馬荒れて
吹きぬけて迷路出る音や秋の風
手に取れば屁をひる虫や秋の風
山宿や木の實落つ音夜もすがら
木の實割るや猿にかも似し深山人
竹に結ふ色紙や賤が苦屋にも
題於漱石作「それから」之末尾
顧れば星の縫瀬に似たりけり

懷友

秋風に我が瘦脛は吹かるゝを